

The Mill on the Floss における Maggie、語り手、George Eliot

松 本 三枝子

序 章

『フロス河の水車場』(1860)が、苦悩と葛藤の小説であることは、議論の余地がないだろう。それは、ヒロインの Maggie Tulliver の苦悩と葛藤だけではなく、彼女の父である Mr Tulliver、兄の Tom Tulliver、そして、友人の Philip Wakem や恋人の Stephen Guest の苦悩と葛藤の物語でもある。

この小説は、執筆された時代よりも数十年過去に遡り、19世紀初期のイギリスの田舎を舞台に設定されている。つまり、この後にジョージ・エリオットが確立する手法で物語が語られていく。ヴィクトリア朝の読者は、物語と共に数十年過去を振り返り、登場人物たちに自らの記憶を重ねて想像力を働かせていく。現代の歴史小説とも称したいこのエリオットの手法は、Felix Holt, *The Radical* (1863)でも、*Middlemarch* (1871-72)でも有効に使用された語りの手法といえる。

上記2作の小説は、いずれも第1次選挙法改正の時代を振り返り、物語が語られている。『フィーリクス・ホールト』では、選挙法改正に焦点を絞りながら、当時のイギリスの選挙の実態や、新興中産階級の内実が批判的に語られていく。『ミドルマーチ』では、その過去への視野はさらに広がり、ヴィクトリア朝イギリス社会全体を見通すようなパノラマ小説となっている。大昔ではなく、数十年前の社会とは、ヴィクトリア朝の読者にとっては、自らの若い時代であり、ひとつ前の世代、つまり親の時代でもある。それ故に、この数十年の時差は、ヴィクトリア朝の読者が自らの形成過程を客観的に振り返り、考えることを可能にするのである。全ての出来事は偶発的なものではなく、必ずその原因があるとするエリオットの考えに基づいて、ヴィクトリア朝の読者は、現状のように至った原因を遡及して、来し方を考えることになる。過去は現在を知る上で、不可欠なものであり、将来を決定するものとなり、重要なのである。

『フロス河の水車場』では、19世紀初期にイギリスの田舎に生きる思考する女性の自我の形成過程が詳らかになる。それは、例えば、Graham Martinの指摘にもあるように、マギー・タリヴァーの遺伝子のみで決定されるものではなく、19世紀初期のイギリスの田舎という時代と社会、つまり彼女を取り巻く環境が、その形成過程に大きな影響を及ぼすことになる(49)。

この小説が、ジョージ・エリオットの自伝的小説であることは、異論がないだろう。それは、小説の中でマギーが直面する苦悩の選択が、Mary Ann Evans (エリオットの実名) 自身が直面したものであったからだけではない。Rosemarie Bodenheimer や、Nancy Henry、Kate Flint らが指摘しているように、マギーが、誰にも頼らずに自らの力で考え抜き、自らの道徳的基準に基づき苦悩の選択をしている点が、重要である。もっとも、マギーの苦悩の選択は、死へと向かうものであり、メアリ・アン・エヴァンズの選択は、生へ向かうものであり、その先にはジョージ・エリオットという作家としての輝かしい人生が展開することになる。

この論文で考察したいのは、自らが直面した苦悩の選択を、ジョージ・エリオットがどのように小説の中で描いているのかである。1851年にロンドンに出ることを決意したメアリ・アン・エヴァンズは、さらにその数年後の1854年にドイツへとGeorge Henry Lewesと旅立っている。夫婦生活は破綻していたとはいえ妻子のあったG. H. ルイスとの出奔は、メアリ・アン・エヴァンズに兄との絶縁を迫るものとなった。

ボウデンハイマーは、*The Real life of Mary Ann Evans* において、人間がエデンの園にいた時には、選択の苦しみはなかったが、楽園喪失後に選択のジレンマを経験することになるとして、“Labor of Choice”の章で、マギーの選択を分析している。前述したようにボウデンハイマーは、マギーの選択をその結果において悲劇的選択と見るのではなく、女性が自らの責任に基づいて選択をしていることを、むしろ積極的に評価している。

しかし、この小説の最後の箇所、4週間を要したとといわれるジョージ・エリオットが、自伝的小説として読まれることに抵抗して、マギー・タリヴァーと自分との間に取って創作した距離感を、作者の分身ともいえる語り手の分析を通して考えてみたい。

1 語り手の位置

『フロス河の水車場』に最初に登場するのは、1人称の語り手の「私」である。この小説の第1章で、雄大なフロス河とその河沿いに広がる St. Ogg's の町、さらに支流のリプル川とその川沿いにある水車場、川に架かる石橋など、詳細にフロス河周辺の美しい自然に満ちた情景が描かれていく。その情景を懐かしく眺めている人物が次のように登場する。

It seems to me like a living companion while I wander along the bank and listen to its low placid voice, as to the voice of one who is deaf and loving. *I remember those large dipping willows. I remember the stone bridge.* (7 emphasis added)¹

ここに登場する「私」は、上記の表現からも、久しぶりにフロス河を訪れて、懐かしい田舎の自然に没入し、過去の思い出に浸っている。フロス河を遡りながら、両岸に広がる自然の美しい描写は、これを眺め歓喜している語り手の感性と、自然への渴望を反映している。また、“I remember those large dipping willows” や、“I remember the stone bridge” 等、繰り返される“I remember”の表現から、語り手にとり、この景色が馴染みのものであると同時に、久しぶりに訪れて、眼前に広がる景色と自らの記憶とが重ね合わされることに歓喜していることがわかる。上記の分析からすれば、この小説の第1章における語り手は、かつてはこのフロス河周辺に暮らしていたが、久しくここから離れて都会に住む人物であり、しばらく前と推測される子供時代に遡って、これから物語を語っていこうとしているのである。Graham Martinによれば、この語り手は、水車場でも、聖オグの町でも、読者が属している教養ある社会にも等しく打ち解けている(39)。つまり、作者であるエリオットの分身と位置づけられる。そこにもう1人の人物が登場する。

Now I can turn my eyes towards the mill again, and watch the un-resting wheel sending out its diamond jets of water. *That little girl* is watching it too: she has been standing on just the same spot at the edge of the water ever since I paused on the bridge. (8 emphasis added)

ここで始めて登場するにもかかわらず「あの少女」と強調し、読者に注意を向けるように招いている。しかし依然として、「私」が語り手であり、少女は語られる対象にすぎない。しかし、少女と語り手は同じように水車に魅了されて我を忘れていた。語り手と少女の視線が重ね合わされ、読者が語り手と少女との関係を知ろうとした矢先に、突然文章は途切れてしまう。そして、読者は語り手が夢を見ていたことを知らされる。

Ah, my arms are really benumbed. I have been pressing my elbows on the arms of my chair, and dreaming that I was standing on the bridge in front of Dorlcote Mill, as it looked one February afternoon many years ago. Before I dozed off, I was going to tell you what Mr and Mrs Tulliver were talking about.... (8)

ここで明確に、語り手は登場人物であることを止めて、これから述べられる過去の物語の語り手として、読者を導いていこうとする。

ミハイル・バフチンは、『小説の言葉』において、「小説は長い間、抽象的な思想的考察と政治評論的価値判断の対象でしかなかった」(12)と指摘して、自らの研究の先駆性と重要性を主張している。バフチンによれば、小説における構成的・文体論的統一体の基本的タイプは、次の5つになる。

- (1) 作者の直線的な文学・芸術的叙述（その多様な変種のすべてを含む）。
- (2) 様々な形式の口頭での日常的物語の様式化（語り）。
- (3) 様々な形式の（書き言葉による）半文学的叙述（書簡、日記その他の様式化）。
- (4) 文語によっているが芸術外的な作者の発話の様々な形式（道徳的・哲學的・科学的議論、修辭的雄弁、民俗学的記述、議事報告その他）。
- (5) 主人公たちの文体論的に個性化された発話。（バフチン15）

これらの文体論的統一体は、小説の中の単なる構成要素ではなくて、小説の中で相互に結合しあい、芸術的体系を作り上げることになる。

ここでは、主に上記(2)、(4)、(5)に焦点を絞り、語り手の位置を分析していきたい。注目したいのは、女性が構成する集団のネットワークとコミュニケーションの在り方が、いかに描かれているかということである。例え

ば、マギーの母親の姉妹である、the Dodson sisters の物語である。第1部第7章「叔母と叔父の登場」では、トリヴァー夫人の3人の姉妹とその夫が、トリヴァー家を訪ねて来た時の様子が語られている。年の順から言えば、Mrs Glegg、Mrs Pullet、Mrs Tulliver、Mrs Deane であろうが、結婚後の姉妹の力関係は、むしろその夫の経済力により影響を受けている。

明らかに、トリヴァー夫人が底辺に位置づけられて、口煩い長姉のグレッグ夫人はもちろんのことだが、妹のディーン夫人からさえも、軽視され同情されている。その理由は、トリヴァー夫人が他の姉妹に比較して、著しく愚かであるという訳ではない、彼女の不幸はその夫の頑迷さに起因する経済力の無さである。旧弊なトリヴァー氏は、新しい時代の変化に抵抗しながら、取り残されていく人物として描かれている。彼が息子のために分不相応といえる教育を受けさせようと決意したのも、息子には自らとは異なる新しい生き方をさせようと望んでのことである。父が息子に期待しているのは、聖オッグの町で成功する人々（ウェイケム弁護士や、ゲスト氏、ディーン氏等）と、対等に渡り合える知識を身につけることであるが、父親の意図とは裏腹に、トムの受けた高額な紳士教育は、彼を何ら助けることにはならない。

この後に展開するトリヴァー氏の裁判での水利権の喪失や破産は、時代の変化に適応できずに、破滅していく人間の姿を描いている。しかし彼は時代の変化の犠牲者ではなくて、物語は、トリヴァー氏の頑迷さと思慮の欠如を指摘して止まない。しかし、同様に新しい変化に適合して成功している弁護士のウェイケムや、ゲスト氏に代表される新興中産階級の物質主義や世俗主義へも、語り手は否定的な視線を送っている。John Kucich が “George Eliot and Objects: Meaning as Matter in *The Mill on the Floss*” において正しく指摘しているように、聖オッグの町においては象徴的なものさえも、経済的意味と深く結びついており、経済力が、つまりは物質主義が支配する空間となっている(321)。

この地域では、名家であるドドスン姉妹が共有しているものもまた、そのような物質主義や世俗主義であることが、上記の第1部第7章で明らかになる。彼女たちが精魂傾けて蓄積するレース、付け毛、衣装、リネン、食器等は、彼女たちの物質主義を語って止まない。また実家のデコーラムを遵守しようとする長姉のグレッグ夫人も、貸金業で小金を貯めているプチ・ブルジョワに他ならない。友人の死亡を大仰に嘆くプレット夫人だが、

彼女の衣装への過剰な執着は、読者の嘲笑を誘うものとなっている。

From the sorrow of a Hottentot to that of a woman in large buckram sleeves, with several bracelets on each arm, an architectural bonnet, and delicate ribbon-strings—what a long series of gradations! In the enlightened child of civilization the abandonment characteristic of grief is checked and varied in the subtlest manner, so as to present an interesting problem to the analytic mind. (49)

ドドスン姉妹の物質主義は、衣装や帽子等に矮小化されて提示されるのみならず、正に金銭と遺産が彼女たちの会話の底流に流れている。グレッグ夫人はマギーやトムのために僅かではあるが遺産分けしてやる意思があることを、恩着せがましく語っている。プレット夫人がその死を嘆いている友人は教区一番の金持ちである。その遺産を全て夫の甥に遺し、教区の誰にも、中でも親しかったプレット夫人にさえ何の形見分けも無かったことを嘆いているようだ。読者は、ここで語り手により描かれるドドスン姉妹の世俗主義や物質主義を軽蔑し、嘲笑する。Deirdre Davidも“Maggie Tulliver's Desire”において、“The worldly lives of Maggie Tulliver's relations are ... defined in negative terms: not enlightened, not sublime, not romantic, lacking principles and visions”(217)と分析している。

さらに、裁判に負けたタリヴァー氏が、破産し家財道具を競売にかけざるをえないほど零落しても、援助を手控え、関わりになるのを回避するドドスン姉妹に、読者は彼女たちの世俗主義や物質主義の中核にある利己主義を認識せざるをえない。Leslie Stephenが軽蔑するこれらの田舎の中産階級の利己主義と俗悪さは、マギー・タリヴァーの人生の悲劇でもある(91)。なぜならマギー自身は彼らの物質主義や俗物主義を超克しようとして苦闘しているからである。Graham Martinは、マギーの欠乏は物理的物質的なものではなく、感情的文化的なものとしている(51)。

明らかにマギーの志向する将来は、語り手が支持する未来のヴィジョンの中にある。つまり、『フロス河の水車場』の前半では、語り手は少女マギーの側に寄り添い、彼女の知性や愛情への渴望に理解を示し、共に未来を見つめている。しかし、物語後半で、彼女が娘に成長し、スティーヴンと駆け落ちした辺りから、この関係は崩れていく。

それは、物語結末で、スティーヴンとの出奔後に帰って来たマギーに対

して、語り手が聖オッグの女のコミュニティをいかに描いているかを見るとわかる。第7部第2章「聖オッグの町の審判下る」では、仮想と現実が比較されている。仮想では、駆け落ちした後に、マギーとステイーヴンが結婚して戻って来た場合の、彼らに対する町の反応が描かれている。

We judge others according to results; how else?—not knowing the process by which results are arrived at. If Miss Tulliver, after a few months of well-chosen travel, had returned as Mrs Stephen Guest—with a post-marital *trousseau*, and all the advantages possessed even by the most unwelcome wife of an only son, public opinion, which at St Ogg's, as elsewhere, always knew what to think, would have judged in strict consistency with those results. Public opinion, in these cases, is always of the feminine gender—not the world, but the world's wife.... (396-97)

章題にある「審判」(judgment)とは、法律的な意味ではなく、宗教的・道徳的表現として用いられている。正確に言えば、ステイーヴンはルーシーと婚約さえしていないのであるから、マギーが彼と駆け落ちしても法律的に罰せられる訳ではない。問題は、moralityである。マギーの道徳観、倫理観をどう考えるかである。その審判を下すのは町の女たちであり、世論(public opinion)と表現されているが、むしろ女性間で交わされるゴシップによるのである。

たとえ駆け落ちしても結婚して戻って来れば、町一番の金満家の息子夫妻を、女たちは訳知り顔で受け入れる。むしろ最後まで、頑固に彼らを受け入れない女性がいれば、招待状を貰えないからだろうと揶揄することで、世論の一体性を守っている。読者はこのような世論の道徳規準のいい加減さに呆れるが、次にマギーが現実を選択したことへの町の反応を読み進めるうちに、この世論がマギーに及ぼす影響の重大さを無視することができなくなる。彼女の駆け落ちから、町への帰還までの苦悩の選択を、読者は知っているが、町の人々は知ろうとさえしない。Philip Fisherが“Self and Community in *The Mill on the Floss*”で分析しているように、マギーは自らの社会的価値をこのような町の反応から知るのである(76-7)。結局、行商人の Bob Jakin 以外に彼女を受け入れてくれる者は誰一人としていない。世間は彼女を有害かつ危険と断じ、彼女を排斥することを決めたのである。

聖オッグの町の審判とは、ある種の世俗的宗教とも呼べるものであり、

厳しい信仰や倫理観に基づくものではない。しかし、マギーに同情的であった教区牧師のケン博士でさえも抵抗できない力を持つことになる。聖オグの町において、社会を構成している物質主義や俗物主義は、倫理や道徳までも支配していることになる。町の人々の倫理や道徳を司る教区牧師でさえも、その影響下にあるのである。

ボウデンハイマーは、エリオットが G. H. ルイスとドイツに駆け落ちした直後に、ヨーロッパの女性知識人に関してのエッセイを書いていることに注目して次のように書いている。

The “seed of future activity” which attended this rebirth included a new interest in writing about the lives of European women, as if Marian Evans now desired to redefine “woman” in more generous terms the Victorian England allowed. Her Essay “Woman in France: Madame de Sablé” was written during this period and published by Chapman.... (88)

妻子あるルイスと駆け落ちしたエリオットが、当時のイギリスの道德観から解放されることを望んで、ヨーロッパの女性知識人について書いていながら、マギーの孤立を余儀なくする聖オグの女たちの排他的な審判を、なぜ容認したのであろうか。U. C. Knoepfelmacher は “Tragedy and the Flux: *The Mill on the Floss*” において、語り手が世間の妻たちの声を受け入れる振りをしていると解釈している。

Pretending to adopt the voice of “not the world, but the world’s wife” ... the narrator becomes a satirist who blames society for barring its doors to an innocent victims. (208)

諷刺家とは、現状を批判的に見ている人物であるが、改革者ではないという意味では、現状を容認する人物でもある。この語り手のスタンスは、マギーの葛藤と苦悩を解決するよりは、むしろそれらを劇化しようとした、作家としてのエリオットの意図によるものだと考えられる。

物語前半では、都会から来た賢い語り手は、自らの子供時代を重ね合わせて、田舎の少女マギーに同情を寄せ、彼女の周囲の人々の物質主義や俗物主義に軽蔑を表している。マギーの苦悩や葛藤の原因は、彼女が周囲の

物質主義や俗物主義から逸脱していることにあり、それに対して語り手は理解を示していたのである。しかし、スティーヴンとの駆け落ち後に、自らの意思と責任において、聖オッグの町に戻った時、マギーが罪人のように町の人々から白眼視され、孤立無援に陥る状況を、語り手はむしろ厳しく眺めており、マギーは町の人々のみならず、語り手からも孤立している。このように分析してみると、語り手のマギーへの位置は物語の前半と後半では変化している。少女時代のマギーと、成長し娘となったマギーに対する語り手の位置は、明らかに異なるといえるのである。

それではさらに詳細に、語り手の変化を考察するために、マギーのスティーヴンとの出会いから駆け落ちの場面を見てみよう。

II 駆け落ち、恍惚、そして判断停止

マギーとスティーヴンの恋愛は、言語を超えたところから始まっている。最初の出会いで、2人が相互に引かれあっているのは明らかだが、それを言語では否定しようとしている。スティーヴンは、2人を引き合わせた恋人の Lucy に、マギーを好きなタイプの女性ではないと打ち明けるが、語り手はすぐ次のように、読者に告げている。

But you, who have a higher logic than the verbal to guide you, have already foreseen, as the direct sequence to that unfavourable opinion of Stephen's, that he walked down to the boat-house calculating, by the aid of a vivid imagination, that Maggie must give him her hand at least twice in consequence of this pleasant boating plan.... (308-09)

スティーヴンはマギーの透き通るような大きな黒い瞳に魅了され、マギーは、彼の歌声に誘惑され、身動きがとれなくなる。この小説の前半では、マギーの音楽への興味は、彼女の文化への渴望として表現されている。例えば、フィリップ・ウェイケムの奏でる音楽は、彼女の文化への渴望を満たすものとして理解できる。ルーシーが聖オッグの町には、音楽が分かる男性が2人しかいないと言うとき、フィリップ同様にスティーヴンも、マギーの根源的な渴望を満たす対象となることを、語り手は読者に予告しているのだ。しかし、フィリップとスティーヴンの音楽が意味するものは、

マギーにとり異なっている。フィリップと共にいる時には、マギーは兄であるトムの抑圧から解放されて自分らしさを取り戻すことができる。トムの極めてヴィクトリア朝的で家父長的価値観のために、自己犠牲や禁欲を受け入れようと葛藤するマギーを、自己解放と自己実現へ導くのがフィリップである。

一方、スティーヴンの歌声は、マギーを虜にして、彼女の精神を麻痺させるものとして描かれている。

Maggie always tried in vain to go on with her work when music began. She tried harder than ever to-day; for the thought that Stephen knew how much she cared for his singing was one that no longer roused a merely playful resistance; and she knew, too, that it was his habit always to stand so that he could look at her. (337)

マギーにとり、スティーヴンの声は、抵抗できぬ誘惑の声であり、彼女の生来持っていた衝動的な性格を立ち上がらせるものでもある。ルーシーを泥の中に押し倒したり、人形の頭に釘を突き刺したマギーの衝動性は、子供時代には、無邪気なものと容認される。語り手はむしろ、彼女の周囲の無理解を考慮して、この衝動性を容認している。彼女がそのような行動をとるのは無理からぬことと、読者に感じさせている。

出会った直後から、マギーはスティーヴンの魅力と危険に十分に気が付いており、スティーヴンも同様である。彼には婚約者同然のルーシーがいて、マギーは明らかに身分違いの女である。それ故に、マギーが教師になるために、聖オググの町を出ることを決意するのは、スティーヴンから離れるためである。マギーのフロス河や、水車場への愛着を考えれば、彼女の決意は、自らの家族や、過去との絆を断つほど重大な決意といえるのである。マギーは彼の前では、自分が制御できなくなることに気が付いている。スティーヴンの声に対する彼女の無抵抗と呪縛は、彼女の女性としての性的目覚めでもある。別離を決意しながらも、パークハウスでの舞踏会で、彼女はスティーヴンと共に温室へと向かう。温室は彼女にとり、非日常の世界である。

“How strange and unreal the trees and flowers look with the lights among

them,” said Maggie, in a low voice. “They look as if they belonged to an enchanted land, and would never fade away: —I could fancy they were all made of jewels.” (357)

マギーの大好きな自然は、温室の中には無い。彼女がそこを “strange and unreal” と表現していることから、彼女の戸惑いが感じられる。しかし同時にそこが魅力的であることも彼女は認めている。つまり、パークハウスで催された舞踏会が、マギーの日常からかけ離れたものであるように、スティーヴン自身も彼女にとり、非現実的な存在なのである。そのような温室を、宝石でできた魔法の国と彼女は表現している。つまり、スティーヴンの属する世界を、魅力はあるが、虚飾の世界と感じていることになる。マギーが選択すべき世界はそこには無いと、彼女自身が感じている。マギーの日常生活は、一家の破産や父の死後には、辛いことばかりである。彼女の楽園はどこにあるのか。

物語前半にある、第2部第7章「黄金の門をすぎる」では、トムとマギーの幸福な子供時代が終わったことを、次のように語り手は読者に告げている。

They had gone forth together into their new life of sorrow, and they would never more see the sunshine undimmed by remembered cares. They had entered the thorny wilderness, and the golden gates of their childhood had for ever closed behind them. (159)

子供時代という楽園を出た後、マギーは、精一杯の知性と責任感で、生きて行くことになるのだが、子供時代の幸福とつながる父や兄との絆を、マギーは決して断つことができない。上記に分析したように、スティーヴンの世界が、マギーを虜にして、至福の時間を体験させる世界でありながら、有機的な子供時代の楽園的世界とは異なり、“strange”、“unreal”等のむしろ否定的な表現で描いていることに注目したい。つまり彼女はスティーヴンの魅力と危険を、擬似的楽園として表現しているのではないだろうか。明らかに、彼女の分別と倫理観は、彼の不適合性を示して止まないのだが、実際には、彼女は彼と駆け落ちしてしまうのである。それはなぜなのか。

Rachel Ablow は、*The Marriage of Minds* において、スティーヴンの説得

とマギーの反論を、当時盛んになっていた離婚自由化の議論と絡めて、興味深く論じている。最初に、スティーヴンの議論を見てみよう。

... "I am breaking no positive engagement: if Lucy's affections had been withdrawn from me and given to some one else, I should have felt no right to assert a claim on her. If you are not absolutely pledged to Philip, we are neither of us bound." (364)

確かに、法律的には、スティーヴンとルーシー、マギーとフィリップが婚約していたり、結婚していたりしている訳ではない。さらにスティーヴンは、もはや愛情を感じていない相手と一緒にするのは、むしろ不自然であり、相手を惨めにすると説いていく。彼のこの議論は離婚自由化論者と共通すると、アブロウは次のように分析する。

In making his claim as to the legitimacy of their marrying ... Stephen very closely echoes a contemporary advocate of divorce-law liberalization.... Similarly, according to Stephen, once he and Maggie recognize they love one another, it would be immoral for them to keep their implicit promises to Philip Wakem and Lucy Deane. (74)

愛情が感じられなくなった後にまで、夫婦である故に互いを拘束するのは、むしろ不道德であると、当時の離婚自由化推進者は議論していた。確かに、スティーヴンの説得は、この議論に極めて近い。ある意味では、現在の2人の愛情を重視する新しい考え方ともいえる。

一方、マギーは、彼とは異なり、それまでの人間関係や過去との繋がりに基づいて、自らの義務や責任を考えていく。スティーヴンと関係することにより、ルーシーやフィリップを傷つけることになれば、彼らの信頼を失い、マギーの誠実さは地に落ちることになる。保守的ともいえるマギーの考え方であるが、前述したアブロウは、この小説における感情を重視する考え方は、ジョージ・エリオットを単純に保守的とは非難できないとしている。アブロウが比較しているのは、Margaret Oliphantの *Phoebe Junior* である。ここに登場するフィービー嬢は、マギーと同種の困難な選択に直面する。しかし、フィービー嬢の選択は、物質的に豊かな男と結婚するこ

とにより、自己実現を果たそうとするものである。ここで展開するオリファントの結婚観は、物質主義的であり保守的なものであるが、マギーのステイヴンへの執着は、ひとえに、彼女の彼への愛によるのである。マギーの選択は、そのステイヴンの愛を退けて、1人で町へ戻るというものである。フィービー嬢の選択が、自己利益を冷静に判断したものであるとすれば、マギーの選択は倫理的なものであり、自己責任に基づいている。

マギーが退けたものを知るために、ステイヴンとの関係をさらに見て行こう。彼女がトムに求めていたが、満たされなかった愛と思い遣りを、彼女はステイヴンから与えられる。

Maggie felt that she was being led down the garden among the roses, being helped with firm tender care into the boat, having the cushion and cloak arranged for her feet ... all by this stronger presence that seemed to bear her along without any act of her own will, like the added self which comes with the sudden exalting influence of a strong tonic—and she felt nothing else. Memory was excluded. (376)

ステイヴンの保護と、導きにより、マギーの自我は眠り、過去の絆は忘れ去られる。より強く、大きい存在に抱かれて、彼女の意識は薄らいでいく。

彼女がステイヴンに誘われるままに、フロス河を舟で下って行く時、彼女は、前述した魔法の国を下って行くようである。それは彼女が幼年時代から馴染み、よく知っているフロス河の自然に満ちた情景の中を運ばれて行くのではない。舟がどこまで川を下ったのかを、彼女が全く気付いていないことから、彼女が意識的には閉じた空間の中にいたことがわかる。つまり自宅には戻れないほど遠くに来てしまったことに気が付くまで、彼女の意識は至福の中で、眠っている。

考えてみれば、これこそが、楽園的な時空といえるのかもしれない。つまり、彼女自身は、何も考える必要も無く、子供のように彼に守られている。これまで描かれてきた、知性があり自己主張するマギーは影を潜め眠ってしまっている。そのような至福の経験の後に、彼女が直面するジレンマは、子供時代に引き付けられた絵本の魔女のお話に繋がる。水に沈められても、死なずに泳ぐのは魔女であり、溺死すれば、ただの可哀想な老女と

いうお話である。魔女になるか、潔白であっても、死しか残されていないというジレンマである。スティーヴンとこのまま駆け落ちすれば、マギーが魔女になることは必至である。つまり彼女は、聖オグの町では生きて行けない。しかし、このまま戻っても、もはや彼女の社会的価値は無に等しい。

前述したオリファントの小説『フィービー嬢』のヒロインであれば、スティーヴンと駆け落ちではなく、結婚できるように行動したであろう。この違いが、オリファントとエリオットが各々のヒロインを介して読者に伝えたかったものの違いであろう。エリオットの小説である『フロス河の水車場』が、読者に語っているのは、知的なヒロインの少女時代から娘時代までの葛藤の過程である。

この物語の結末から考えれば、マギーの父親が予言したように、賢い女は不幸になるということになるのだが、テキスト全体では、それほど単純でもない。批評家には、極めて評判の悪い、この物語の結末をジェンダーの視点から再読したい。

III 主体性を勝ち得るために

スティーヴンとの関係の中で一貫していたのは、マギーの彼への依存性である。彼女は元来愛されることを強く求めては来たが、男の所有物になることには強く抵抗してきた。例えば、最愛の兄に対して次のように反駁する場面がある。

“I am grateful to you. But, indeed, you can't quite judge for me—our natures are very different. You don't know how differently things affect me from what they do you.” (318)

マギーは、父の仇敵であるウェイケムの息子、フィリップに会うことを、兄に禁じられてきた。上記の引用は、フィリップと再会したいと言うマギーに対する、兄の冷酷な反応と糾弾に対するマギーの自己主張である。第6部第4章「兄と妹」と題されたこの章では、トムとマギーの兄妹の違いが語られている。子供時代と異なり、マギーは兄の欠点を認識している。しかし、彼女はそれを欠点とは明言せずには相違と表現している。彼女に代わ

り、語り手がトムの言葉を「想像力に欠けた、同情心の無い心から発せられたもの」(318)と断じている。この段階では、トムは父親との約束を守るために水車場を取り戻し、立身出世しようと努力している。彼は明らかにディーン氏を模範として、物質主義的な成功を夢見ている。父親を愛することにかけては、トムと同じであるが、フィリップ・ウェイケムと友情を交わすことができるのが、マギーの人間性であり、感受性なのである。マギーは、フィリップとの関係からも、兄と自分の違いを認識しており、自分の意見を主張して、兄に判断を委ねようとはしていない。

マギーは障害者であるフィリップの愛情を受け止め、彼の教養に敬愛を感じている。トムの中には決して見出せぬ教養を、マギーはフィリップの中に見出しそれに引かれていることを認識している。ジャム・パフを無邪気に食べていたマギーとは、明らかに異なる成長した娘のマギーがここにはいる。

John Kucich は“George Eliot and Objects”において、このようなマギーの抵抗を次のように分析している。

Maggie's great crisis in the novel is finally proved by Tom's attempt to control her as a thing in his battle with the Wakems. Insensitive to her human needs, Tom tries to reduce Maggie to the status of a possession of the Tulliver family, to conceive her value only as it contributes usefully to the Tullivers' goals, which are related both to economics and to identity: the recovery of financial independence and respectability. (326)

破産した家族の経済的自立と名誉を回復するという家族の目的のために、マギーの人間性は犠牲にされるべきだというのが、トムの考え方である。このようなタリヴァー家の兄妹の対立は、19世紀初頭のイギリスの社会変化の縮図でもある。産業革命後に生じた様々な変化は、次第にイギリスの田舎にも及んでくる。産業資本や専門的知識により、新興中産階級が富と権力を獲得する一方で、そのような変化に適応できずに経済力を失い、転落する人々がいる。ゲスト商会、ディーン氏、弁護士ウェイケムが前者であるとすれば、トムとマギーの父であるタリヴァー氏は後者である。

このような新しい変化の社会においては、トムの目指している父の名誉の回復と、家族の資産である水車場を取り戻すことは、未来というよりは

過去へと向かう行動である。確かに、彼の禁欲的な努力により、父の負債は完済されるが、彼の禁欲主義と物質主義は、ボブ・ジェイキンも驚くほどである。ボブはマギーにトムがあまりにも仕事に没頭し過ぎていると心配する。

“.... An’ it worrets me as Mr Tom ‘ull sit by himself so glumpish, a-knittin’ his brow, an’ a-lookin’ at the fire of a night. He should be a bit livelier now—a fine young fellow like him. My wife says, when she goes in sometimes, an’ he takes no notice of her, he sits lookin’ into the fire, and frownin’ as if he was watchin’ folks at work in it.” (316)

行商人から身を起こし、今ではトムを下宿させているボブであるが、彼から見てもトムの陰鬱な禁欲主義は過剰である。人間性の豊かなマギーと比較した時に、トムに欠落しているものが顕著となる。しかし、彼女は自分が兄に対して影響力が無いことを認めている。そのようなマギーの存在は経済力が優先され、物質主義を重視する中産階級の発展に対して、批判的であるが脆弱なものとなっている。それはこの小説の結末で、マギーがトムの救済へと向かいながら、結局は2人とも洪水に飲み込まれ溺死することからも明らかである。

結末での、マギーの2つの選択に焦点を絞り、最近の研究に目配りしながら、分析を続けたい。そのひとつは、マギーがスティーヴンと別れて聖オグの町に帰った後に、再びスティーヴンから求婚されたにもかかわらず、結局自らの幸福ではなく、責任を果たすことを選択したことである。ふたつ目は、洪水のためフロス河が氾濫しているにもかかわらず、マギーが、自らの命を賭してトムを救済するために水車場へ向かったことである。

この2つの選択は通底しており、マギーにとり重大な意味を持つ人生の選択となる。この論文の冒頭で言及したローズマリ・ポウデンハイマーは、マギーのこのような苦悩の選択を、エリオットの他の小説にも頻出するテーマとして位置づけている。

Through characters from Amos Barton to Gwendolen Harleth, she would tell it, dramatizing in innumerable variations the gap between her characters’ private choices and the fatal or comic misreadings of their communities. (86)

マギーの悲劇は、彼女が自らを犠牲にして、自らの責任を果たそうとして実践した選択が、トムにより、あるいは聖オッグの人々により誤読されたことによる。彼女は「墮ちた女」とはならず、町に戻ったにもかかわらず、「墮ちた女」の烙印を押されてしまう。ルーシーやフィリップへの責任から、スティーヴンとの別離を決意したのだが、誰も事の真相を知ろうとはしないのである。

このマギーの選択に、作家であるエリオットの経験を重ねて見ないわけにはいかない。エリオットは、1851年に自らの家族と離れてロンドンに出た後に、既婚者の G. H. ルイスと同居することを選択している。マギーの選択が、自らを犠牲にするものであった一方で、エリオットの選択は新しい人生の可能性を獲得するものであった。ふたりの選択は相反するものに見える。

しかし、マギーの選択は、単純ではない。David Lodge が、『パフチン以後』において書いているように、19世紀のリアリズム小説は、自由間接話法を使用することにより、語り手のディスコースによる登場人物の支配が不可能になり、読者の解釈行為は活発になる(87)。ここでロッジは、主に『ミドルマーチ』の分析を行っているのだが、『フロス河の水車場』における語り手の分析にもそれは適切である。

例えば、マギーの選択のひとつである、スティーヴンとの駆け落ちである。語り手は、彼女の行為を厳しく指弾し、聖オッグの町に戻ることを決意させる。エリオット自身のルイスとの同居を考えれば、語り手(エリオット)の指弾はマギーに過酷とも感じられる。しかし、Suzy Anger は、“George Eliot and Philosophy” において、次のように分析している。

The narrative aligns itself with the severe reading of Maggie's actions to such an extent that occasionally, as it moves into free indirect discourse, it is difficult to distinguish between the narrator's and Maggie's thoughts. But a novel works not only through direct statement, but also through its descriptions, and in these scenes the powerful representation of the joy Maggie feels with Stephen, in what is otherwise presented as a fairly bleak life, indicates that George Eliot also resists that harsh reading. (94)

この小説における語り手の道徳律は、自己利益と他者への思い遣りは均衡

をとるべきものではなく、個人の利益の欲望は征服されるべきだという厳しいものである。しかし、アンガーはそのような厳しい道徳律を、この小説全体が支持しているのではないと述べて、スティーヴンと共に過ごしたマギーのひとつの恍惚の時間を反証としてあげている。つまり、そのような道徳律から解放された時間を、マギーに過ごさせたことは、厳しい語り手の逸脱行為ともいえるのである。

都会から来た、賢い語り手は、自らの子供時代を語るように、この小説を語っているが、物語はそのひとつの視点、価値観、道徳律のみで描かれてはいないことになる。川下りで、スティーヴンは、自発的に行動しようとしないうマギーに、日傘をさしてやり、コートを着せてやるなど、子供や弱者の世話をするように面倒を見ている。この章の冒頭でも言及したように、このような細やかな愛情表現は、マギーのスティーヴンへの完全な依存性の裏返しでもある。利発で自己主張の強い少女時代のマギーとは、全く異なるマギーがここには描かれている。語り手によれば、マギーの意識は眠っていたのかもしれないが、レイチェル・アプロウがいうように、それは、イギリスの既婚女性の法的状況である、*coverture* を想起させるものである。この時代におけるイギリスの既婚女性は、法的には夫と一体化して、自らの個人としての権利を喪失する。マギーがスティーヴンとの関係において、このような受動性と依存性の中に閉じ込められてしまうとすれば、知的な女性にとり至福の時とばかりはいえないはずである。

それ故、洪水の夜に、再びスティーヴンからの求愛の手紙を読んだ時に、マギーが苦悩しながらもこれを退け、聖オグの町を出て、教師として自活しようと決意したことは、女性が主体性を取り戻すための闘いとも読めるのである。そのように決意した後に、洪水に気付き、舟に乗り、川に乗り出し、兄を救済するために舟を漕ぎ続ける彼女の圧倒的な活力と決断力は瞠目に値する。

Kate Flint が“George Eliot and gender”において、男性のみならず、女性のファンタジーにも野心の欲望が存在するのではないかという Nancy Miller の分析を援用して次のように述べている。

... Maggie's demise may be read not only as a capitulation, but also as an act of resistance: an act of resistance on George Eliot's part to letting Maggie's story take its place among any preestablished family grouping in fiction. It is rather, a

kind of anti-*Buildungsroman*, that is, a novel that, instead of taking its young male protagonist to maturity, sophisticating, and adequate worldly compromise, leads Maggie to an uncompromising moral triumph and death. (173)

確かに、マギーは、家族の物語からは常に逸脱した存在であった。マギーの女らしくはない利発さや、強情な性格は、手に負えない黒髪と日に焼けた肌に象徴されている。醜いアヒルの子であった少女時代とは異なり、成長してからのマギーはその黒い瞳の美しさに男性を魅了する存在となっている。初対面の時から、スティーヴンは彼女の瞳に見つめられたいと願望している。さらに彼女の魅力は、より普遍的なものとして描かれている。

The culmination of Maggie's career as an admired member of society in St Ogg's was certainly the day of the bazaar, when her simple, noble beauty, clad in a white muslin of some soft-floating kind ... appeared with marked distinction among the more adorned and conventional women around her. (348)

聖オッグの町で開催されたバザーの会場で、清楚なマギーの美しさが際立っていることが描かれている。もっとも女性たちは、彼女が紳士たちを引きつけていることに嫉妬して、素直にそれを認めず、ルーシーの可愛らしさに軍配を挙げている。このように、娘になってからのマギーの美しさと魅力は、語り手により何度も言及されている。娘になったマギーは見られる対象として、その魅力を発揮する。それは結婚市場における女性の価値の獲得でもある。バザーの会場で彼女の周囲に集まった人々が、紳士たちであったことからそれがわかる。

スティーヴンとの関係では、正にそのような男性に愛される存在、見られる対象として、マギーは自意識を抑制し、眠るような時を過ごす。それは主体としての自我の否定でもある。第6部第14章「目覚めて」で、そのような自らの判断停止状況からの目覚めは、叔父や叔母に代表される新興中産階級の物質主義や、家父長的ジェンダー観から逸脱していた子供時代への回帰を意味することになる。

彼女が自分自身を取り戻すことができるのは、父や、兄、そしてルーシーやフィリップ等との絆の回復においてである。しかし、それはマギーの社会的価値の回復とはならない。スティーヴンと駆け落ちしながらも、結婚

せずに聖オッグの町に戻ってくるというマギーの選択は、「謎の選択」であり、世間の人々にはもちろん、彼女の家族にさえも、複雑でわかりにくいものである。彼女は敢えて誤読されることを覚悟で、自らの判断に基づき行動する道を選択したのである。

しかし、最後の瞬間に、トムはマギーへの誤解を解き、彼女を理解するに至ると、レイチェル・アブロウは次のように分析している。

Having always regarded Maggie as a kind of possession—one who can be owned or disowned at will—recognizing her sacrifice as a “self-consciously futile” attempt to rescue him grants him a new way to see both her and the world of ethical relationships. No longer able to judge her as someone outside of himself, he comes to recognize both the profundity of her act and the extent of his debt to her. (91)

しかし、マギーが最愛の兄から、生涯にわたり求めていた理解と愛情を得ることができるのは、彼女の死を賭した行動ゆえである。豪雨の中、舟を漕ぎ兄のいる水車場まで向かうことは、普通の女性にできることではない。スティーヴンに守られ、自我を抑制していた、微睡むマギーとは異なり、家父長的ジェンダー観を突き破って、マギーは舟を漕ぎ続ける。洪水と、フロス河の氾濫という非日常の世界が、彼女を解放して、彼女自身が持っていた女らしさの枠組みを超えた力を発揮させたのである。彼女の知性と感受性は、聖オッグの町の物質主義を逸脱している。抑圧されてきた彼女のエネルギーは、洪水という暴力的な自然により、町が破壊された時に解放される。このようなマギーの人生の苦闘を、Deirdre Davidは *Intellectual Women and Victorian Patriarchy* において、次のように分析している。

... Maggie Tulliver embodies more movingly than any other character in Eliot's fiction the conflict felt by an intelligent woman living in an androcentric world. Feeling the sadness of *The Mill on the Floss* is tonic antidote to immersion in the myth of 'George Eliot', iconic sage. (224)

マギーの苦闘を、ヴィクトリア朝時代の知識人のジレンマと苦闘に重ね合

わせて、デイヴィッドは分析している。女性に客体であることを要求するヴィクトリア朝時代の枠組みから、逸脱した女性の葛藤と解放を劇化した存在として、マギー・タリヴァーはエリオットの小説の中で特異な位置を占めている。『ミドルマーチ』の Dorothea Brook や、*Daniel Deronda* の Gwendlen Harleth と異なり、容易には抑制されない知的女性のエネルギーを、『フロス河の水車場』の結末は象徴しているといえるのである。

結 び

『フロス河の水車場』の結末における、マギー・タリヴァーの選択は、ヴィクトリア朝の批評家のみならず、後世の批評家からも批判されてきた。加えて、この小説が自伝的小説であることから、ジョージ・エリオット自身の選択の結果と、マギーのそれとの大きな乖離に注目しないわけにはいかない。当時の道徳律から逸脱したエリオットの選択は、彼女の新しい人生と作家としての成功を獲得するものになった。他方、マギーの選択は、彼女に死を宣告するものとなっている。それ故に、エリオットが、あるいは語り手が、マギーに求める厳しい道徳律に対して議論は集中してきた。

しかし、最近の研究では、マギーの選択の劇化は、単一の価値観によるのではないと指摘されている。本論においては、語り手の位置に注目して議論を進めてきた。語り手は物語の前半では、中産階級の物質主義や世俗主義に批判的であり、マギーの文化への渴望に理解を示している。しかし後半では、マギーが聖オグの狭量な道徳律で断罪されるのを容認している。このように、マギーと語り手の関係が異なってくるのは、語り手の位置や価値観が必ずしも一貫していない故である。

さらに、スティーヴンとの関係において、マギーが至福の時を過ごしながらも、少女時代の知性や自己主張などが影を潜めてしまい、自我の眠ってしまった状況に陥っていることを明らかにした。そのような幸福ではあるが、自己否定的な状況からの脱却として、マギーの最後の選択を位置づけることで、『フロス河の水車場』における結末の意味を、知的女性の主体性の獲得として再読した。

洪水の中で、トムを救済するために舟を漕ぎ続けるマギーの決断力とエネルギーは、彼女の知性と判断力が他に委ねられるのではなく、彼女自身のものになっていることを示している。子供時代から、生涯にわたり彼

女を誤読し続けてきたトムも、彼女の存在を認めるに至るのである。それ故、この小説では、マギーは最後には彼女自身の生き方を選択したことで、それまでの誤読を説いて、自らの存在を証明できたことになる。

『フロス河の水車場』における知的女性の葛藤は、『ミドルマーチ』や『ダニエル・デロンダ』等の後期小説では、より穏やかなものとなる。『フロス河の水車場』における語り手の位置の変化は、知的女性の葛藤に対する語り手の矛盾を物語っており、それは、作者であるジョージ・エリオットの迷いを反映しているといってもよいだろう。しかし、エリオットが最終的に選択したマギーの死は、家父長的なヴィクトリア朝社会に対するマギーの抵抗の激しさを象徴するものとなっている。

注

- 1 『フロス河の水車場』からの引用は、George Eliot, *The Mill on the Floss*, ed. Carol T. Christ. (New York: Norton, 1994) による。以後は頁数を本文中に記す。

Works Cited

- Ablow, Rachel. *The Marriage of Minds: Reading Sympathy in The Victorian Marriage Plot*. Stanford: Stanford UP, 2007.
- Anger, Suzy. "George Eliot and philosophy" *The Cambridge Companion to George Eliot*. Ed. George Levine. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- バフチン, ミハイル. 『小説の言葉』伊藤一郎訳, 平凡社, 1996.
- Bodenheimer, Rosemarie. *The Real Life of Mary Ann Evans: George Eliot, Her Letters and Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1994.
- David, Deirdre. *Intellectual Women and Victorian Patriarchy: Harriet Martineau, Elizabeth Barrett Browning, George Eliot*. London: Macmillan, 1987.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss* ed. Carol T. Christ. New York: Norton, 1994.
- Fisher, Philip. *Making Up Society: The Novels of George Eliot*. Pittsburgh: U Pittsburgh P, 1981.
- Flint, Kate. "George Eliot and gender" *The Cambridge Companion to George Eliot*. Ed. George Levine. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Knoepfelmacher, U. C. *George Eliot's Early Novels: The Limits of Realism*. Berkley: U of California P, 1968.
- Kucich, John. "George Eliot and Objects: Meaning as Matters in *The Mill on the Floss*"

The Mill on the Floss における Maggie、語り手、George Eliot

Dickens Studies Annual: Essays on Victorian Fiction eds. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guillian. 12 (1983): 319-40.

Levine, George. "Intelligence as Deception: *The Mill on the Floss*" *PMLA* 80 (1965), 402-9.

ロッジ, デイヴィッド. 『バフチン以後』伊藤哲訳, 法政大学出版, 1992.

Martin, Graham. "*The Mill on the Floss* and The Unreliable Narrator" *George Eliot: Centenary Essays and an Unpublished Fragment*. Ed. Anne Smith. London: Vision, 1980.

Stephen, Leslie. *George Eliot*. New York: Macmillan, 1909.